

THEME [5]

入力業務の

# DX: AI-OCR編

壁に当たるケース>>>

## 読み取りミスがあるから、使えない

士業が本来、DXと相性がよいと言われているのも、士業の仕事がAIによって奪われると言われているのも、士業の仕事で「入力業務」が重要な要素を占めているからだ。

そして、手書きの文字や紙に印字された文字の入力を、ロボットに読み込ませる技術がAI-OCR(人工知能技術を取り入れた光学文字認識機能)だ。

しかし、このAI-OCRを活用している士業事務所は現状では少ない。その理由はなぜか？

会計事務所向けに、AI-OCRを活用した自動仕訳業務のRPA『SCARU(スキャル)』を開発販売する株式会社スキャルの取締役・坂本竜郎氏に話を聞いた。

「その理由の一つには、AI-OCR

で、専門業界で使用する用語の学習が進んでいないことが挙げられると思います」(坂本氏)

スキャル社がOCRを利用するときは、同社が『固有表現抽出』と呼ぶ作業を行う。OCRで読み取った一次情報から会計業務特有の表現を抽出し、そこから書面のレイアウトを類推・分析した上で、読み取りを行う。AIだけに任せるのではなく、人の手を一手間加えて読み取っているのだ。

こうした作業が必要なのは、OCRで正確に文字を読み取るためには、書面にどのような情報がどのようにレイアウトされているのかを分析することが必要になるからである。AI-OCRでは、AIがこのレイアウトを類推・分析・学習するのだが、その学習がまだ進んでいないのだ。

例えば会計や経理関係の書類で言えば、請求書や領収書のフォーマットは各社で異なっており、通帳やクレジットカードの明細も各

社のフォーマットがある。フォーマットが一定なレシートなどは、確かにAI-OCRで96%程度の精度で読み取ることができるものの、そうではない会計書類はガクンと精度が落ちるのが現状。

スキャル社では現在、全国の会計事務所から月10万枚を超える証憑が送られてきて、自動仕訳を行っているという。これはAIに学習させるには「まだまだ不十分」なボリュームだというのが、学習は進む。

スキャル社では、前述したようにAIの学習不足の部分をマンパワーで補足しながら、精度を上げている。必要なのは、そうした業務フローの設計と切り分け。マンパワーとのハイブリッドでDXは進んでいく。

さらに、士業でAI-OCRが使われていない理由には、別の理由もあるのではないかと坂本氏は話す。

「たとえ96%の高い精度で安

自動仕訳ソフト

SCARU (スキャル)

<https://scaru.co.jp>

SCARUは税理士事務所の生産性向上を実現する自動仕訳ソフトです。スキャンした画像をSCARUへアップロードするだけで翌営業日までに仕訳データとして納品します。煩わしい初期設定やITの知識は必要ありません。誰でも簡単に利用できます。

画像と仕訳が一画面で表示されるので、仕訳の修正は楽々。さらに修正した仕訳はシステムが学習し次回仕訳データに反映します。繰り返し利用することで生産性がどんどん向上していきます。

DX化、働き方改革の実現に向けた税理士事務所の取り組みを加速させるためサポートしてまいります

料金

仕訳データ作成

1行あたり

20円(税別)

お問い合わせ先

株式会社スキャル

TEL 03-6897-4103

MAIL support@scaru-inc.com

FEATURE

アップロードした画像は仕訳データ作成の他、様々な項目で絞って閲覧・印刷が可能。書類をコピーして保管したり、見たい時に資料を探したりする手間もなくなります

定期的に読み取れたとしても、やはり専門家の仕事ですから誤りは許されません。専門家なら、残り数%の誤りを探するために、自分の目でチェックし直すことでしょう。

もちろんそれが正しい姿だと思います。しかし、そこで多くの方が『結局、人の手でやるのだから』と考えます。そして『機械はやっぱり使えない』と結論づけてしまうのです」(坂本氏)

それなら、AI-OCRは100%の精度になるまで、土業の仕事に使えないのだろうか。そもそもどこまでテクノロジーが進んでも、100%の精度を出すことは難しいのではないだろうか。

そうした中ですでに、会計事務所向けの自動仕訳業務の中で、AI-OCRを利用しているSCARU。そこに矛盾はないのか？

「例えば、仕訳業務をアウトソースする場合を考えてください。アウトソース先から帰ってきたデータは、お客様に提供する前に必ず事務所で内容を確認しますよね。

つまり、そもそも、そうしたチェックは会計事務所が行うことに価値があると私たちは考えています。私たちは、税務監査はRPAではできないと割り切ってサービスを提供しています。SCARUでは、仕訳データの作成までは全

自動で行いますが、そのあとに仕訳データをチェックしたり修正していただくのは、監査業務の一環として、会計事務所様をお願いしています。私たちは、より高度な知識が求められる本業に会計事務所様が専念いただけるように、お手伝いをしているわけです」(坂本氏)

機械でできない仕事と機械のできる仕事を切り分けて、後者を機械に任せる。これこそがDXの第一歩だ。

#### 突破のポイント>>>

### 「蓄積」で、成長曲線が急カーブに変わる

自動学習や機械学習と呼ばれる技術は、大量のデジタルデータをAIに学習させていくことで、精度が高くなっていく。経験や場数がモノを言うのは、人も機械も変わらない。

「これはどのような業界においても同じですが、始めから百点満点のアウトプットの出せるAIはありません。将棋や囲碁でも、敗戦から学習を続けることで人間に勝てるようになりました。

SCARUも同様です。どの会計

事務所の仕訳も始めから百点満点で仕訳を行えるわけではありません。会計というのは、顧問先ごとに処理が違ったり癖がありますので、別の会計事務所のお客様で学習したデータを使うことはできません。

弊社では国内最大手の辻・本郷 税理士法人様に、2年前からSCARUを導入していただいておりますが、当初は間違いの多かったものを、根気よく育てていただきました。そのおかげで現在は、高い精度で仕訳ができるようになり、『この2年間はムダではなかった』というお言葉をいただいています。

DXに取り組むということは、人を育てるのと同様に時間のかかることだと思います。ですから私たちはお客様に、一緒に機械を鍛えていただくことをお願いしています」(坂本氏)

DXへの取り組みは、即効性を求めて行うべきではない。導入時の負荷はかかるものの、後から必ずそれが成果となって返ってくる。それは間違いのないことだ。そう考えれば、人材育成よりも、はるかに効率のよい作業かもしれない……。

最後に、もう一つ伝えておきたいポイントがあるという坂本氏。



「DXでは、クラウド化とデジタル化への変革を混同されている方が多いように思いますが、クラウドを利用するだけでは、DXにはなりません。クラウドにあるデジタルデータを共有できるようになってはじめて、DXが進んでいくようになります」(坂本氏)

たとえ紙をスキャンをしてペーパーレス化しても、それが画像データのままで、棚にファイリングしてあるのか、パソコンのドライブに保存してあるかの違いだ

けにすぎない。

OCRの最大のメリットは、テキスト検索をして資料を探せることにある。例えば、お客様から質問があった時に、テキストで検索して、調べたいものにすぐたどりつけるのが理想の状態だ。

さらに言えば、テキストで検索して資料を探し当てても、結局見るものはデータ化された状態の「紙」。だから結局、紙からは離れられないのだ。

だからと言って、「紙」のまま

でいいということではない。e-文書法や電子帳簿保存法の要件改正が進む中、これから、紙をスキャンして画像データにするところまでは一気に加速するだろう。

しかしDXは、それらをデジタル化することから始まる。その要のツールとなるのが、AI-OCRだ。そして、坂本氏の言うように、デジタルをクラウドに繋げていくことで、DXが加速していくようになる。

## THEME [6]

# 所内システムの

# DX: SFA編

### 壁に当たるケース>>>

## 導入する目的が、 明確になっていない

「明確な問題意識を持って、この問題を解決したい、この目的を実

現したいとご相談いただくケースは、多くはありません。それよりも、評判を耳にしてご相談にいらっしゃるケースが非常に多くなっていますね」

2021年1月から、株式会社船井総合研究所の土業支援部におけ

るDX推進のマネージャーに就任する小川原泰治氏はこう話す。

小川原氏は、これまで同社の土業支援部において、土地家屋調査士向けのコンサルタントとして活躍。並行して土業事務所のDX支援も数多く行ってきた。現在、特